様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　３ 年　６ 月 １１ 日現在

機関番号：１３６０１
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2018～2020
課題番号：１８Ｋ００３５１

研究課題名（和文）続書を中心とした『水滸伝』の研究

研究課題名（英文）The Shuihu Zhuan, especially on the continuations

研究代表者
氏岡　真士（UJIOKA, MASASI）

信州大学・学術研究院人文科学系・教授

研究者番号：６０３０３４８４

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　3,300,000円

研究成果の概要（和文）：　清代には『水滸伝』の続書として、『後水滸伝』・『水滸後伝』や『蕩寇志（結水滸全伝）』 などが刊行された。また『宣和譜』や『忠義＜王＋旋＞図』のように『水滸伝』異聞とでも言うべき戯曲も出現した。これらの作品は一般に、親梁山泊的なものと反梁山泊的なものの二つに分類される。この観点からすれば、『後水滸伝』や『水滸後伝』は前者だが、他は後者であり、かつ後者は金聖歎が手を加えた七十回本と見地を同じくすることになる。しかし実際はそれほど単純ではない。たとえば『水滸後伝』も、『宣和譜』や『蕩寇志（結水滸全伝）』も、どちらも祝家荘故事に影響を受けている。そのような問題について研究を進めた。

研究成果の学術的意義や社会的意義
　従来の『水滸伝』研究は、おもに明刊本について行なわれてきた。それは清代の『水滸伝』が、いわゆる七十回本（明末の崇禎十四年（1641)の序をもつ）の独擅場だったという認識にもとづく。そのため実態解明が遅れている清代のものを主な対象として、その続書を中心に研究を行なった。清代における『水滸伝』とその続書の展開は、従来の一般的な理解とは必ずしも一致せず、相当複雑だが、その具体的な様相を、本研究は一定程度明らかにすることができた。これは中国文学研究のみならず、当時の印刷出版業の具体相を探る手がかりにもなり、また『水滸伝』の影響を受けた日本の江戸文化を考えるに資する知見を提供する点でも意義を有する。

研究成果の概要（英文）：　In the Qing Dynasty, some of the continuations of the Shuihu-zhuan were published, such as the Hou-shuihu-zhuan, the Shuihu-houzhuan and the Dangkouzhi (Jie-shuihu-quanzhuan), and other stories were also played, e.g. the Xuanhe-pu and the Zhongyi-xuantu. These works were generally classified into two types, i.e. pro-Liangshan-po and anti-Liangshan-po. From this point of view, the Hou-shuihu-zhuan and the Shuihu-houzhuan are the former, but others are the latter, which share the same opinion with 70-chapter edition of the Shuihu-zhuan edited by Jin Shengtan. However, it is not simple as it looks, for example, the analysis shows that the story of Zhu-jia-zhuang had an impact on the Shuihu-houzhuan, the Xuanhe-pu and the Dangkouzhi. We studied such a problem.

研究分野：中国文学

キーワード：水滸伝

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

１．研究開始当初の背景

『水滸伝』に関する研究は、従来から盛んであるが、それらはおもに明刊本を中心として行なわれてきた。『水滸伝』は伝統的には元の施耐庵らの作と言われるが、じつは武定侯の郭勛という有力者が『三国志演義』・『水滸伝』を私刻したとされる明の嘉靖年間（1522～1566）が一つの画期と見なせるし、実際にも明代後半に多様な版本が出現し現存する以上、明刊本を中心に『水滸伝』が研究されるのは、自然なことではある。

またもう一つ、明末の崇禎十四年（1641）ごろ刊行された、いわゆる七十回本の存在も無視できない。この七十回本は、有名な金聖歎による一種の改編本である。すなわち従来の諸本に描かれる内容の後半を“腰斬”つまり切り捨てたうえ、結末も変えてしまう、という革新的なテキストであった。そして胡適が中国において近代的な『水滸伝』研究を開始したとき（「水滸伝考証」1920）、彼は多くをこの七十回本に依拠したように、少なくとも中国では、いつしか『水滸伝』といえば七十回本の独擅場になっていたと言っても過言ではない。そこで七十回本に至る明刊本の諸本を比較検討して、文学的成就の優劣を論じたり、『水滸伝』の原初的形態が探求されたりなどするのも、これまた自然なことではある。

とはいえ清初に七十回本が出現したからといって、ただちに七十回本以外の『水滸伝』が駆逐されてしまったとまで言えるだろうか。もしそうなら、たとえば七十回本に“腰斬”されたはずの後半部分を前提としたものも含めて、いわば『水滸伝』の続書と呼ぶべき小説や戯曲が少なからず清代に生まれているのはなぜか。それらの実態や相互の関係などはどうであるか。こうした問題点について、必ずしも具体的に解明されていない状況が、本研究開始当初の背景である。

２．研究の目的

本研究の目的は、上述の問題点の具体相を解明してゆくことを中心とした。その際、清代の中国において七十回本以外の『水滸伝』がただちに駆逐されたとは言い難い点そのものについては、研究代表者がこれまでに実施してきたプロジェクトにおいて、いわゆる簡本系統や清印本のテキストを中心として、いくつかの新知見を明らかにしてきた。その成果を踏まえつつ、本研究ではおもに『水滸伝』の続書と呼びうる諸作品に注目しながら、調査分析を進めることとした。

３．研究の方法

研究の方法は、各種の作品や版本を個別に掘り下げ、それらの特徴や背景や縦横のつながり等を探るといったオーソドックスなものである。

調査分析の対象としては、まず当然ながら続書が俎上に載る。そのうち狭義の続書、つまり『水滸伝』そのものの結末以降を描く小説としては、清初の『後水滸伝』・『水滸後伝』および十九世紀中葉の『蕩寇志（結水滸全伝）』が主な作品である。また広義の続書ないし派生作品としては、清初の介石逸叟『存廬新編宣和譜（翻水滸記）』や清代中頃の成立とおぼしき宮廷大戯『忠義璇図』といった戯曲類などが挙げられる。

またこれらは『水滸伝』そのものの存在を前提として二次的に生まれたものと考えられるから、調査分析に際しては、『水滸伝』自体の更なる研究も当然ながら必要になる。さらには清代の日本すなわち江戸時代における受容状況も、参考に資するものである。

４．研究成果

およそ以下のような、いくつかの具体相を明らかにすることができた。

清初の『後水滸伝』・『水滸後伝』はどちらも、首領の宋江が毒殺されるなど梁山泊の好漢たちの多くが死んでゆくテキストを前提としており、かつ田虎・王慶故事の反映が見られないから、『水滸伝』のうち簡本や百二十回本ではなく、百回本の続書とみてよい。このうち『後水滸伝』は、宋江らが南宋の楊幺らに生まれ変わって反乱を起こす過程で、かつて彼らを死に至らしめた奸臣たちの生まれ変わりに復讐する点に主眼があると分析できる。ただし現存刊本は一つしか無く、また康熙年間（1662～1722）の劉廷璣『在園雑誌』の批評からも窺えるように、残念ながら当時は好評を得られなかったようである。対照的に『水滸後伝』は、梁山泊の生き残りが様々に活躍し、最終的に海外の暹羅国に新天地を得る内容だが、清代において多くの愛読者を得たことが窺える。すなわち各種の版本が存在し、それらは康熙甲辰（1664）の封面をもつ原刊本の系統と、乾隆三十五年（1770）の序をもつ蔡元放批評本の系統に二大別される。そして原刊本そのものに限っても、ロンドンの大英図書館蔵本を嚆矢として、筑波大学附属図書館蔵本＞早稲田大学附属図書館蔵本＞天理大学附属天理図書館蔵本の順に版を重ねたことが、各葉の特徴の比較から実証的に明らかになった。

これらが前提とする百回本『水滸伝』のうち、先日亡くなられた高島俊男氏が「一番いいテキ

スト」と評したのは容与堂本の北京Ｂ本（研究代表者は「北図本」と呼ぶ。中国国家図書館蔵）である。ただし「庚戌」（万暦三十八年 1610）の序文が無い。しかし中国社会科学院文学研究所蔵の容与堂本は、残本ではあるがこの序文を概ね有し、かつ北図本と全く同版であることが明らかになった。このテキストについて、従来は序文があるから日本の国立公文書館蔵本（内閣文庫本。北図本に一定の修整を加えている）と同じだと見る向きもあったが、それは誤りである。またこの内閣本の後修本が上海図書館に蔵されるが、これらと北図本や嘉靖本・評林本といった主要テキストとの関係等についても、旧来の説を検証の結果、その成り立ちにくいことが明らかになった。

さて清初の『後水滸伝』や『水滸後伝』が宋江はじめ梁山泊の好漢たちに同情的なのに対して、十九世紀中葉に成立した『蕩寇志』は、金聖歎による七十回本『水滸伝』の続編・完結編であることを強く意識し、かつ宋江らへの敵意を隠さない。このような思想的傾向は、広義の続書として先に「３．研究の方法」でも紹介した清初の『宣和譜』や清代中期の『忠義璇図』といった戯曲類にも指摘できる。とはいえそれは一面的な見方であって、たとえば祝家荘故事に注目すると、また別の傾向が窺えることを明らかにした。『水滸伝』の祝家荘故事では、欒廷玉は祝家荘の祝太公に味方して梁山泊に敗れ姿を消す。これに対して『宣和譜』では、この敵役が実質的な主役として梁山泊に勝利する。また『蕩寇志』では、欒廷玉はもちろん、その弟の欒廷芳や祝太公の兄弟にあたる祝永清・万年といった人物まで登場して梁山泊と戦う。ところが欒廷玉は『水滸後伝』にも登場し、しかもそこでは、梁山泊の生き残りと手を組んで登雲山の首領となり、やがて飲馬川の好漢たちと合流し、最終的に彼らは暹羅国に大集結するのである。

登雲山も飲馬川も、『水滸伝』の祝家荘故事にゆかりの深い土地である。この二か所が暹羅国とともに『水滸後伝』で重要拠点とされるのは偶然ではあるまい。そもそも一般に『水滸後伝』は、李俊が中国を去って暹羅国の王になったという『水滸伝』の簡単な記述を発展させた作品のように言われるが、ではどう発展させたのかという問いに対しては、必ずしも明快な答えは無かったように見受けられる。本研究によれば、その肉付けに当たっては祝家荘故事がかなり活用されているのである。ただしその活用が、必ずしも『水滸後伝』の作者である陳忱の独創ではないことは、やはり清初の作である『宣和譜』から窺える。さらにその後の『蕩寇志』も視野に入れれることによって、『水滸伝』の祝家荘故事が清代に有した重要性が明らかになった。このような形での『水滸伝』受容の傾向は、親梁山泊か反梁山泊かというような思想的傾向に基づく二分法以外の観点を採用することによって、初めて見いだせるものである。

ところで『水滸伝』や『水滸後伝』は、曲亭馬琴の『椿説弓張月』や『南総里見八犬伝』に影響を与えたとよく言われるように、江戸時代の日本でも馬琴に限らず広く好評を博したことは贅言を要しない。この点に関連して、沢田一斎の撰ともされる唐話辞書『俗語解』における『水滸伝』およびその語釈の利用状況を調査分析した。その結果、関連する語彙の採集対象は『水滸伝』の百二十回本を主としつつ七十回本も参照していること、沢田と交流のあった岡白駒の語釈はその『水滸（全）伝訳解』ではなく『小説精言』から引用されていること、むしろ従来は批判的に扱われていると言われた陶冕の『忠義水滸伝解』がしばしば肯定的に利用されていること、これらの傾向からは『俗語解』に最新の研究を取り入れようとする姿勢が窺われ、したがって学者でもある沢田一斎による『俗語解』撰述説に一定の蓋然性を新たに加え得ること、などが明らかになった。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計11件（うち査読付論文　9件／うち国際共著　0件／うちオープンアクセス　8件）

１．著者名 氏岡真士	４．巻 76
２．論文標題 『俗語解』と『水滸伝』	５．発行年 2019年
３．雑誌名 汲古	６．最初と最後の頁 25－30
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 氏岡真士	４．巻 7－2
２．論文標題 《忠義セン圖》的足本與殘本	５．発行年 2020年
３．雑誌名 信州大学人文科学論集	６．最初と最後の頁 159－171
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 伊藤加奈子	４．巻 7－2
２．論文標題 “ 這家 ”“ 那家 ” そして “ 他家 ” に関する日中対照	５．発行年 2020年
３．雑誌名 信州大学人文科学論集	６．最初と最後の頁 135－158
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 氏岡真士	４．巻 6（通巻53）
２．論文標題 《後水滸傳》的構思	５．発行年 2019年
３．雑誌名 信州大学人文科学論集	６．最初と最後の頁 131-141
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 氏岡真士	4．巻 2018-2
2．論文標題 談上海図書館所蔵容与堂本《水滸》	5．発行年 2018年
3．雑誌名 文学研究	6．最初と最後の頁 84-96
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 氏岡真士、閻小妹	4．巻 13
2．論文標題 『俗語解』の論点	5．発行年 2019年
3．雑誌名 信州大学総合人間科学研究	6．最初と最後の頁 162-170
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 伊藤加奈子	4．巻 6（通巻53）
2．論文標題 “ 著名 ” の日中比較 ： 高倉健は「有名」俳優なのか？	5．発行年 2019年
3．雑誌名 信州大学人文科学論集	6．最初と最後の頁 143 - 167
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 氏岡真士	4．巻 8(1)
2．論文標題 另一個北京所藏的容與堂本《水滸》	5．発行年 2020年
3．雑誌名 信州大学人文科学論集	6．最初と最後の頁 33-40
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 氏岡真士	4．巻 28
2．論文標題 『水滸後伝』と『宣和譜』	5．発行年 2020年
3．雑誌名 饕餮	6．最初と最後の頁 49-65
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 氏岡真士	4．巻 8(2)
2．論文標題 原刊本《水滸後傳》管窺	5．発行年 2021年
3．雑誌名 信州大学人文科学論集	6．最初と最後の頁 129-142
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 伊藤加奈子	4．巻 8(2)
2．論文標題 冷蔵庫はいつ開いたのか? ： 動作の省略と場所表現についての日中対照	5．発行年 2021年
3．雑誌名 信州大学人文科学論集	6．最初と最後の頁 101-127
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

〔学会発表〕　計0件

〔図書〕　計1件

1．著者名 氏岡真士	4．発行年 2021年
2．出版社 科研報告書別冊	5．総ページ数 96
3．書名 続書を中心とした『水滸伝』の研究	

〔産業財産権〕

〔その他〕

－

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考
研究分担者	伊藤　加奈子 (Ito Knako) (80293489)	信州大学・学術研究院人文科学系・准教授 (13601)	

７．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕　計0件

８．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関